

Title	NMR Study of High-Tc Superconductivity in Multilayered High-Tc Cuprates and MgB <sub>2</sub>
Author(s)	小手川, 恒
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/43534">https://hdl.handle.net/11094/43534</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	小手川 恒 <small>ひさし</small>
博士の専攻分野の名称	博士(理学)
学位記番号	第 17154 号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 基礎工学研究科物理系専攻
学位論文名	NMR Study of High-T <sub>c</sub> Superconductivity in Multilayered High-T <sub>c</sub> Cuprates and MgB <sub>2</sub> (多層型高温超伝導体と MgB <sub>2</sub> における高温超伝導の NMR による研究)
論文審査委員	(主査) 教授 北岡 良雄  (副査) 教授 菅 滋正 教授 三宅 和正

#### 論文内容の要旨

1911年の超伝導の発見以来、様々な超伝導物質が発見され、現在最も高い超伝導転移温度  $T_c$  は銅酸化物高温超伝導体の  $\text{HgBa}_2\text{Ca}_2\text{Cu}_3\text{O}_y$  (Hg-1223) における134Kである。しかしながら、この記録は1993年以来、多大な努力にもかかわらず破られていない。一方、従来の金属化合物では最近  $\text{MgB}_2$  において金属化合物では最高の約  $T_c \sim 39\text{K}$  を示すことが報告された。本論文では、これらの物質における高い  $T_c$  をもたらす機構について NMR 測定を用いて研究した。

銅酸化物高温超伝導体は一般に  $\text{CuO}_2$  面の枚数 ( $n$ ) を増やすことによって  $T_c$  は上昇する。しかしながら Hg-1223 のように  $n=3$  で  $T_c$  が最高となり、それ以上枚数を増やしても逆に  $T_c$  は減少する。 $n \geq 3$  の銅酸化物高温超伝導体は酸素の配位数が5配位と4配位の2種類の  $\text{CuO}_2$  面で構成される。それぞれのサイトでの Knight shift から内側の4配位  $\text{CuO}_2$  面 (IP) よりも外側の5配位  $\text{CuO}_2$  面 (OP) の方が多くのキャリアを含んでおり、その差が1. 全キャリア量を増やした時、2.  $\text{CuO}_2$  面の枚数  $n$  を増加させた時に、大きくなることが明らかになった。この差が小さい Hg-1223 等では高い  $T_c$  が得られ、逆に差が大きい Cu-1234 では OP と IP で異なる超伝導転移温度を示すといった層間で分離した振舞いが見られる。つまり、高い  $T_c$  のためには OP と IP のキャリア濃度を等価にすることが重要だと考えられる。

一方、 $\text{MgB}_2$  ではその高い  $T_c$  の超伝導発現機構がこれまでの BCS 機構で理解できるのか、それとも新しいメカニズムが潜んでいるのか明らかにするため  $^{10}\text{B}$ -NMR を行った。  $1/T_1$  の結果から、この系には銅酸化物のような強いスピン相関が存在しないこと、またこの系が  $2\Delta/k_B T_c \sim 5$  の大きな超伝導ギャップをもつ強結合の BCS 超伝導体であることが分かった。Al をドーブした  $\text{Mg}_{1-x}\text{Al}_x\text{B}_2$  において  $x=0, 0.05, 0.07, 0.1$  に変化させた時のフェルミ面の状態密度と  $T_c$  の関係を McMillan 方程式に適用させることによって、約700K 程度の高い周波数のフォノンが電子と結合定数  $\lambda \sim 0.87$  程度で強く結合した結果、約40K の高い  $T_c$  が得られていると結論付けられた。

#### 論文審査の結果の要旨

1911年の超伝導の発見以来、様々な超伝導物質が発見され、現在最も高い超伝導転移温度  $T_c$  では銅酸化物高温超

伝導体の  $\text{HgBa}_2\text{Ca}_2\text{Cu}_3\text{O}_y$  (Hg-1223) における134Kである。しかしながら、この記録は1993年以来、多大な努力にもかかわらず破られていない。一方、従来の金属化合物では最近  $\text{MgB}_2$  において金属化合物では最高の約  $T_c=39\text{K}$  を示すことが報告された。本論文では、これらの物質における高い  $T_c$  をもたらす機構について NMR 測定を用いて研究した。

銅酸化物高温超伝導体は一般に  $\text{CuO}_2$  面の枚数 ( $n$ ) を増やすことによって  $T_c$  は上昇する。しかしながら Hg-1223 のように  $n=3$  で  $T_c$  が最高となり、それ以上枚数を増やしても逆に  $T_c$  は減少する。 $n \geq 3$  の銅酸化物高温超伝導体は酸素の配位数が5配位と4配位の2種類の  $\text{CuO}_2$  面で構成される。それぞれのサイトでの Knight shift から内側の4配位  $\text{CuO}_2$  面 (IP) よりも外側の5配位  $\text{CuO}_2$  面 (OP) の方が多くのキャリアを含んでおり、その差が1. 全キャリア量を増やした時、2.  $\text{CuO}_2$  面の枚数  $n$  を増加させた時に大きくなることが明らかになった。この差が小さい Hg-1223 等では高い  $T_c$  が得られ、逆に差が大きい Cu-1234 では OP と IP で異なる超伝導転移温度を示すといった層間で分離した振舞いが見られる。つまり、高い  $T_c$  のためには OP と IP のキャリア濃度を等価にすることが重要だと考えられる。

一方、 $\text{MgB}_2$  ではその高い  $T_c$  の超伝導発現機構がこれまでの BCS 機構で理解できるのか、それとも新しいメカニズムが潜んでいるのか明らかにするため  $^{11}\text{B}$ -NMR を行った。  $1/T_1$  の結果から、この系には銅酸化物のような強いスピン相関が存在しないこと、またこの系が  $2\Delta/k_B T_c \sim 5$  の大きな超伝導ギャップをもつ強結合の BCS 型超伝導体であることが分かった。Al をドーブした  $\text{Mg}_{1-x}\text{Al}_x\text{B}_2$  において  $x=0, 0.05, 0.07, 0.1$  に変化させた時のフェルミ面の状態密度と  $T_c$  の関係を McMillan 方程式に適用させることによって、約700K 程度の高い周波数のフォノンが電子と結合定数  $\lambda \sim 0.87$  程度で強く結合した結果、約40K の高い  $T_c$  が得られていると結論付けられた。

本研究によって多層型高温超伝導体のサブナノスケールでの電子状態および超伝導状態が明らかになり、最高性能をもつ次世代高温超伝導材料の合成指針を示唆した。また、金属系新高温超伝導体  $\text{MgB}_2$  の電子状態および超伝導状態をミクロな観点から解明し、本系の超伝導発現機構の解明に向けた重要な研究となっている。

以上の結果は、高い超伝導転移温度を示す系のミクロな電子状態と超伝導転移温度との相互関係をはじめて実験的に明らかにしたもので、博士 (理学) の学位論文として十分に価値があると認めることができる。